

公開講演会記録

日中共同制作『萬里の長城』

——最前線の現場から

ドキュメント映像プロデューサー・ディレクター 大野清司



1991年11月18日午後9時、時報とともにTBSテレビで『萬里の長城』の放送が始まった。そして、そのちょうど同じ時刻、海をへだてた中国中央テレビ（CCTV）では『望長城』のオンエアが始まっていた。それは5年におよぶ日中共同制作の到達点だった。

日本側の『萬里の長城』は2時間半、3夜連続のスペシャル感もあってか、ドキュメンタリー番組としては異例の20%近い視聴率を取り、1992年日本民間放送連盟賞最優秀賞を受賞するなど大きな成功を収めた。また中国側の『望長城』も、それまでの中国には

1986年夏にさかのぼる。北京にいた私は、日本から到着するスタッフを迎えに空港に来ていた。そして、やはり日本からの別クルーを迎えに来たCCTV外事処の知り合いとバッタリ会った。久しぶりに会った彼と飛行機が着くまで立ち話をしていたが、ふと思いついて「そういえば万里の長城を全部撮るなんてできませんかねえ」と言ってみた。

ない画期的な作品と絶賛され、その後のテレビ制作の教科書には必ず掲載されている。私は、その日中合作の現場で企画から放送まですべてに関わった。その最前線から共同制作の実際を報告したい。そもそもの始まりはその5年前、

1981年、私が働いていたTBS映画社（TBS100%出資の撮影・映像・制作の子会社）現TBSスパークル）が初めて中国に行けることになっ



TBSテレビ『萬里の長城』1991年放送 主演：緒形拳

たとき、たまたま担当になり、以来、毎年中国に行くようになった。

その頃、NHKがCCTVと組んだ『シルクロード』が話題になっていて、私も便乗して「シルクロード列車の旅」といった番組を中国観光局の受け入れで作ったりしていたが、いつかはCCTVと手を組んで真正面から中国を撮る大型ドキュメンタリーを作りたいと考えていた。

空港でCCTVの知人と会い「万里の長城を」と切り出したのも、そんな思いがふと口について出てきたのだった。すると彼はさらっと言ったのだ。「できるよ！ できる！ 企画書出してよ！」

意外な答えに私は驚喜し、帰国するとすぐA4サイズ8ページの企画書を書きあげた。と言っても中身はほとんどなく、「万里の長城全部撮ります。CCTVが同意へ」というだけ。それを、シルクロード・黄河・長江に続く大型企画……などと手を替え品を替え書き連ねた。そしてそれを上司に提出すると、7月、事前に決まっていたアメ

リカ・ロケに出かけた。

そのロケ中、上司から電話がかかってきた。

「今すぐ帰ってこれないか。あの企画書で今、TBS中が大騒ぎになってるんだ」

そんなことを言われても、現場を放り出して帰れるわけがなく、予定どおり帰国したら、何と『万里の長城』特番企画があったという間に成立していたのである。

実は、直前の1986年6月の株主総会で私がいるTBS映画社の濱口浩三社長がTBS本社の社長に返り咲いていた。当時、それは「青天の霹靂人事」などと言われ、ロケ中に立ち寄ったワシントン支局長にも「どうなるんだい？」と聞かれたりしたが、もちろんそんな雲上人の世界を私を知るわけではない。

だからこれももれ聞いた話だが、入れ替わりにTBS本社の副社長から映画社社長に下りてきたのが大越幸夫さん。この人は1964年にTBSが民放共同の北京支局を開設したときの初

代支局長で、その彼を派遣した報道局長が濱口さん。いわば二人はTBSの中国報道を切り開いた同志だったのだ。

だから、二人とも中国には特別な思い入れがある。そのご両人が本社と制作子会社の社長になったまさにその瞬間に、『万里の長城』日中共同制作の企画書が飛び込んできた。社長同士が話してすぐに企画がまとまってしまったというわけだ。

その後、私は中国側との交渉役の現場プロデューサーにまわり、ディレクターの一人に尊敬する先輩であり心の師でもあるノンフィクション映像作家の藤原道夫さんを推薦した。劇映画の助監督から記録映画に転じ、当時はフリーで映画社の海外取材番組を多数演出し高い評価を得ていた。

撮影が始まって早々にもう一人のディレクターが体調不良で辞退したため、結果的には藤原さんが一人ですべての演出を担当したが、超人的な力を発揮して乗り切った。それも番組が成功した大きな要因だと思う。

1986年中に1時間番組13回分の

企画書を作り、それを元に翌87年2月、第1回の日中合作会議が北京で開かれた。

難航しそうだったのが、日本と中国ではビデオ方式が異なり、どちらを採用するかだった。その問題があるため、NHKとCCTVとの共同制作ではフィルムで撮影していたのだが、民放の場合、出演者は必須であり、コスト的にも技術的にもフィルムはありえなかった。

会議が始まったがほとんどの問題は大きな相違点はなく、最後に撮影方式の問題に移った。TBS側がおらずと日本方式での撮影を提案したところ、CCTV側はあっさり同意したのである。ただし、機材をTBSが用意するのが条件だった。私たちは胸をなで下ろした。

のちにわかったのだが、当時中国も急速にビデオ化が進んでいたが、CCTVにはまだ十分なカメラがそろっておらず、長城の撮影隊は専用機材が確保できれば日本方式でかまわないと考えていたようだ。逆に、日本はバブルの絶頂期。機材をもう一組用意するぐ

らいわけではない。双方の利害が一致してすんなり合意したのだが、日本と中国の経済力に大きな差があった時代なればこそその話である。

こうして基本的な枠組みが固まり、あとはCCTVの上部機関である広播電視部（ラジオテレビ省）が申請した国務院（日本の内閣に相当）の許可を待つだけになった。

ところがその許可がなかなか下りない。じりじりしていると、4か月後の87年6月、突然、「最近の中日関係により一時見合わせたい」との通告が届いた。国務院への批准申請も取り下げ、プロジェクトを無期延期するというのだ。当時の私が書いた報告書には「中国人にとって黄河は母なる河であり、万里の長城は中国人民の血と汗で築いたもの。それを今の日中関係の中で日本人と共同取材するとさまざまな障害が考えられる」と中国側の言い分が書いてある。

ここで「日中関係」とあるのは直接的には今では忘れられたある裁判を指していたが、実はより大きな国内の政

治情勢から様子見を決めたのだと思われる。そうして共同制作はよくわからぬまま休眠状態となった。

88年に入ると日中関係も落ち着き、明るい兆しが見えてきた。そして、5月、国務院に再申請し、11月初めついに「国務院の許可が出た」と電話連絡があった。

そこからは早かった。一気に協定書の細部をつめ、両社長の多忙なスケジュールをぬって、北京での調印式の日取りも12月1日に決まった。

調印式場を中国側は当初、合併ホテルの大広間を考えていた。日本側としては「いや、それよりも」と恐る恐る「人民大会堂でやるなんてムリですかねえ」と聞いてみた。すると、またもや軽い調子で「できるよ、できる。お金出せば使えるから」

日本人から見たら、ホテルと人民大会堂では雲泥の差。ぜひ！ ぜひ！というわけで1988年12月1日、調印式は無事、人民大会堂で行われた。署名したのは日本側はTBSとTBS映画社、中国側はCCTVと中国長城



TBS・CCTV「万里の長城」共同制作調印式（1988年12月1日
人民大会堂にて）

学会だった。長城学会は、長城の研究・保護・啓発を目的に、中国の外交部と文物局双方のOBが作った組織だ。当時の会長は初代国連大使の黄華さんだった。長城自体が

がら現役の大佐なのだという。CCTVには当時も報道・娯楽・農業など10以上のチャンネルがあった。その一つ軍事を管轄するのが彼も所属している軍事部で、そこが共同制作の担当になったという。

部やらせてもらえるなら引き受ける」という返事をもらい、最重要の出演者があっさり決まった。並行して3月から4月にかけて、北京をベースに長城沿線を河北から山西・陝西・寧夏と見て歩いた。

軍事部にしたのは、長城は今も防衛線であり軍事的な要地であるところが多く、撮影許可には解放軍との交渉が必要であること、また、当時の中国はインフラが未整備で、地方へ行くとガソリンの入手が大変なため、軍の基地で給油させてもらったり、ときにはタンク車で運ぶ必要があること、さらに、空撮にも軍の協力が必要だ：等々を総合的に考えてのことだという。実際、撮影が始まると、軍人あがりの運転手（当時、中国取材における大きな悩みの一つだった）に大いに助けられるなど軍事部の恩恵は予想以上だった。

その頃の中国は政治優先から経済優先に大きく舵を切り、人々も羽を伸ばしているように感じられた。一方、社会のさまざまなところでタガが外れ、拝金主義が横行するなど弊害も目立ってきた。4月、私たちが山西省に行っている間に胡耀邦氏が急死し、北京に戻ると天安門広場の人民英雄紀念碑に追悼の花輪が多数供えられていた。その後も地方から北京に帰るたびに広場の花輪と学生が増え、騒然となっていた。

文物（文化財）なので撮影を円滑に進めるためパートナーになってもらったのだという。沿線の国宝級の文物をいかに撮るかも懸案だったので私たちとしても異論はなかった。

調印も終わり、撮影の日程も見えてきたので、翌89年早々から出演者選びを始めた。旬の俳優さんや著名人に軒並み声をかけていったが、緒形拳さんにおずおずとお願ひしてみたら、「全

当初、私たちは5月まで滞在して調査を続ける予定だったが、CCTVから「状況が読めず責任を持てない。とりあえず帰ってくれ」と言われ、4月30日急遽帰国した。そして、緊迫する情勢の中で刻々と伝えられるニュースを遠くで見ながら、あの夜を迎えたのである。

調印式の前にTBS代表团がCCTVを表敬訪問し中国側の制作チームと顔合わせした。現場のトップ・総演出として紹介された人は、驚いたことに軍服を着ている。テレビ局員でありな

きたので、翌89年早々から出演者選びを始めた。旬の俳優さんや著名人に軒並み声をかけていったが、緒形拳さんにおずおずとお願ひしてみたら、「全

当初、私たちは5月まで滞在して調査を続ける予定だったが、CCTVから「状況が読めず責任を持てない。とりあえず帰ってくれ」と言われ、4月30日急遽帰国した。そして、緊迫する情勢の中で刻々と伝えられるニュースを遠くで見ながら、あの夜を迎えたのである。

6月4日から数日間はCCTVとまったく連絡が取れなくなった。

8日、ようやく電話がつながった。「外事処は全員自宅待機。市の中心部は危なくて入れない…」

一方、日本の国内では中国政府と解放軍に対するイメージが非常に悪くなり、共同制作をどうするか不透明になった。対応策を早急に協議しなかったが、事件直前から中国には戒厳令が發布され、外国人はまったく入れない。

逆に、貸与する機材と車両の受け取りにCCTVの代表が来日する予定があった。その場で今後を話し合うこと

になり、中国側は現場トップの例の大佐が自ら来ることになった。

8月4日、東京でCCTVとTBSの会談が開かれた。中国側は、市内も安定してきているので問題はない、ぜひ再開をと強く迫った。

そこで、TBS側は戒厳令下では共同制作を開始しないという原則を立て、様子見しながら戒厳令が解除され次第動けるよう準備を進めるということで合意した。数えて何度目かの様子見だった。

秋になり、治安も問題なかうとうことで、すでに北京に送ってあった取材車両を使って11月から共同ロケハンを開始した。そして年明けの戒厳令解除を見越して、翌1990年1月末の春節から撮影を始めることにした。

1990年1月24日早朝、故宮午門



長城の旅は北京の故宮午門前から始まった
(1990年1月24日)



天安門広場に巨大クレーンを
立て故宮を出る車列を撮った

翌日は春節前の大晦日。八達嶺から続く長城が通る石仏寺村を訪ねた。崩れた長城のレンガを住宅の壁にし、空き缶をテレビのアンテナにする貧しい山の村だった。

緒形さんが歩くと、物珍しそ

前。緒形さんの乗った取材車が走り出し、1年7か月におよぶ『萬里の長城』の旅が始まった。車列はまず天安門をくぐり金水橋を渡って長安街に出た。それを天安門広場に設置された巨大クレーンから撮影する。その後、北京市内を出た車はまっすぐ北を目指した。北京郊外の八達嶺長城に着くと、初めて万里の長城と出会った緒形さんはそのまま一気に急坂を登り始めた。それをカメラマンの内田英治さんと藤原さんが追う。緒形さんとの最初の真剣勝負に「負けるものか!」と内田さんは必死だった。登りきって敵楼（兵士が常駐する監視所）を出たところで緒形さんが「万里長城」と中国語で言う。それをしっかりアップでとらえて、緊張感に満ちた初日が終わった。



緒形拳さんのロケ日数は106日に及んだ

うに一人の少年が近づいてきた。彼の家に行くと、父子二人の家庭に新しいお母さんとその連れ子が

来たところだという。春節を新しい家族で迎える華やいだ空気が満ちていた。

翌朝、目が覚めると雪だった。春節に降る雪を中国では「瑞雪」といい、雨が多くなる兆しと喜ぶ。雪の舞う中、崩れかけた長城を登る緒形さんと村の少年の姿はとても美しかった。

こうして始まった『萬里の長城』の撮影は翌1991年8月まで合計370日余り、うち緒形さんのロケ日数は106日になった。

最初のうちは緒形さんも私たちも手探りで間合いを計っていたが、ロケも2、3回目になると藤原さんも内田さんもこつをつかんできて、あうんの呼吸で撮影が進むようになった。

藤原さんは撮影中、緒形さんにあれこれ言うことはほとんどなかった。毎朝出発前、小さな紙を渡す。そこには簡潔にその日の内容が書いてある。それだけだ。あとは現場に着いたら緒形さんが動き、人々と出会い、見て、話す。それを遠近2台のカメラが追う。そうした撮影を緒形さんが楽しんでくれたことがこの番組が成功した大きな理由だと思うし、それを仕掛けた藤原さんの力も大きいと思う。

緒形さんは私がつきあった出演者の中では格段に手のかからない人だった。酒も飲まないし、撮休日や夜にどこかへ遊びに行くこともない。撮影以外はほとんど一人で部屋にこもっていた。

あるとき、黄河に近い街で「バンドと刷毛を買ってきて」と頼まれた。はて？と思うながら埃っぽい街の雑貨屋で買って届けた。あとで部屋に行ってみると、黄河を撮影したときポケットに入れた砂を刷毛で画用紙に貼りつけていた。部屋にこもって書や絵を描いていたのだ。

共同制作の進め方だが、NHKと

CCTVの『シルクロード』『大黄河』では基本的に日本側と中国側が同じチームで動きともに撮影したという。しかし、われわれ民放がNHKと大きく違うのは出演者がいるということ、日本人の出演者が日本語で話す場面を中国チームと一緒に撮影するのは現実的ではなかった。やがて中国側も出演者を出すと決めたが、その瞬間、日中両チームがともに撮影する可能性は消滅したと言っている。

藤原さんは初めから共同制作について幻想は持っていなかった。日本と中国では見せるお客さんが違う以上、作品作りも同じではありえないというのが藤原さんの考え方であり、それは一貫していた。

私などは中国との長いつきあいもあって、共同制作なんだから多少自分たちの演出をゆずっても「友好第一」にできないかなどと考えていたが、藤原さんはそんなことはしないという点でも明快だった。

もっとも、だったら何故共同制作の必要があったのか？ その答えは私の

中では今もまだ明確には出ていない。

ただ、撮影機材の問題で図らずも露呈したように、当時の日中合作は間違いないく日本と中国の大きな経済格差を前提にしていた。そして今や経済規模で言えばまったく逆転した両国の間で共同制作があるとしたら果たしてどういう形になるのか。いや、そもそも共同制作自体がありうるのか。それもわからない。

とは言え、長城の共同制作においては、適度な距離を保ちながらそれぞれ自由に動けたことで双方にとって納得のいく取材ができたのではないかと思う。だから、最後に「日中同時放送」というアイデアが出たのではないか。その申し出を聞いたとき、私は、今回の合作が彼らにとって歓迎すべきものだったと示しているようでとてもうれしかった。

そうして日中同時に始まった放送は、既述のように双方とも大成功を収め、日本側も中国側も大きな満足感に包まれた。

しかし、放送直後こそ熱狂的に支持

されたTBS『萬里の長城』だった（翌年の新年と黄金週間に2度も再編集版が放送された）が、その後はあっという間に忘れ去られてしまった。

一方、CCTVの『望長城』は中国ドキュメンタリー史上に今も残り続けている。何がそこまで画期的だったのだろうか。

長城の合作が決まったあとCCTV側は6人の作家を集め、立派な台本を完成させた。のちにそれは『東方老牆』という放送とは別の題名で出版され、その後記にこう書かかれている。

TBSのスタッフがこの台本を読んだのち、意味深長な言葉を投げかけた。「あなた方の台本は素晴らしい。だが私たちには大きな難題となった」

「TBSのスタッフ」とは私のことである。彼らは誇らしげなエピソードとして書いているが、私の気持ちはまったく逆だった。

この台本は確かに長城に関する知識を要領よくまとめており、読む台本としてはよくできている。だが、これに沿って撮影しようとしたら、結局は台

本の言葉一つ一つに画をはめていく「はめ画作品」になってしまう。そうしたドキュメンタリー番組の手法は「作家テレビ」と呼ばれ、当時の中国では主流のスタイルだった。

『望長城』は出演者をビデオで追いかけて撮影することで直接現実と向き合い、作家テレビとこの台本を乗り越え新しいスタイルを作り出したのである。

その後も私は海外取材番組を担当し、特に1995年からは『世界遺産』シリーズを担当した。ディレクターの頭数が足りなかった初期や、つながりのあった中国の世界遺産は、私自身が演出も担当して自分なりの方法論の模索もできた。9年間、局プロデューサーの理解もあってかなりやりたい放題できた。

2004年、55歳になったとき、もう日本のテレビではやりきったと思って退職し、中国の北京に移住した。

中国にはそれまで100回近く行っていたが、いつも行っただけで帰る旅人だった。だから、普通に住んで普通の中国人と普通につきあってみたかった。

また、当時の中国はまだ物価が安く

わずかの貯金で当分暮らせたし、何より知り合いがたくさんいて相談相手に困らなかった。CCTVのメイン通訳だったQさんもその一人だ。彼とは、最前線の現場で一緒に仕事をしたが、ある種の同志のような関係だった。

共同制作現場では日本側と中国側の言い分をそのままストレートに双方に伝えたらすぐに喧嘩になってしまう。そこで現場の交渉役である二人が結託し、微妙にニュアンスを変えてそれぞれの上に言うこともあった。これには異論もあると思うが、そうしないと現場がまわっていかないのも事実だ。

そんな彼はその後、私にとっては中国で最高の友人であり続け、北京での生活についても大変世話になった。

北京に行つてすぐ、彼とやはり長城通訳チームの仲間。今は日中間で仕事をしている人と3人で食事をした。そのとき、彼らの収入を聞いて驚いた。もうすでに日本時代の私の収入より多かったのだ。日中逆転を目の当たりにして、その日以来私は安心して彼らにうちそうになることにした。そういう

意味で彼は私にとつて目に見えるリアル中国の代表でもある。

また彼を通じてかつての『望長城』スタッフとの交流も続き、2011年には放送20周年のイベントをやるうという話になった。

総演出だった大佐がその頃、中国ドキュ

メンタリー学会の会長だった縁もあり、『望長城』を回顧する連続番組も作られ、私と藤原さんもインタビューを受けた。

そして、11月17日夜。中国側『望長城』のスタッフと私は北京で、日本側『萬里の長城』のスタッフは東京で、同日同時刻に食事会を始めた。昔と違っ

たのは、ネットでつないでモニター越しに乾杯し合い、同じ空間を共有できたことで、こんなことも共同制作の成果ではな



『萬里の長城』『望長城』放送20周年記念会（北京）

いかと思う。
北京に移った翌年、2005年の夏、あの石仏寺村を訪ねた。緒形さんが初めて中国の人々と接した村だ。

貧しかった山村は一変していた。崩れかかった長城はきれいに修復され、住居は谷の奥に移されていた。村があったところは新しく「水関長城」として観光地になり、近くにはモダンな宿泊施設もできていた。

15年前に知り合った姫少年を訪ねると、長城の管理事務所から立派な青年が出てきた。管理が村に委託されたため、村人も仕事を得てずいぶん豊かになったのだそう。



最初が立石（石仏寺村水関長城）の少年が旅の合点に成長した（緒形拳さん）

2018年6月には藤原さんと、長城の取材で夏秋冬春の四回撮影に行った内蒙古自治

区西ウジュムチンの遊牧民一家を訪ねた。

当時は陸路は許されず飛行機で大きく迂回して行ったが、今回、北京から列車とバスを乗り継いでまっすぐ行くと、西ウジュムチンの街はビルを連ねる大都会になっていた。

翌日、草原に行って家族を訪ねるつもりだった。ところが、その日の夕食の席に突然、家族のお母さんが現れた。聞けば、今は街に住む末娘の家にいるという。あれから27年、お父さんは亡くなったが、76歳になったお母さんは、好きなタバコをあいかわらずスパス吸ってとても元気そうだった。

翌日、草原に行き、集合した一家に再会した。

草原の暮らしもすっかり変わった。牧草地が分けられもう遊牧はしていない。最近では雨が少なく牛ではなくわずかな羊を飼っている。それもオートバイで追う。馬は観光用だけだ。

当時も今も多分中の下あたりの暮らしだと思うが、生活に逼迫感はなく余裕が感じられる。だが、そうした暮らしは牧畜だけでは成り立たないのだろう。煉瓦の家には2番目の息子一家が住んでいるだけで、家族のほとんどは街に住んでいる。

私たちは帰るとき、お母さんは涙ぐんでいた。どうしたのか聞くと「もう会えるかわからないから」と言う。それを聞いた私たちもちょっと切なくなった。

「いや、またゆっくり来ますから。それまで元気でいてくださいよ」と言い、手を振って別れた。

翌年か翌々年あたりにもっと時間をとってまた来ようと思っていた。しかし、翌2019年暮れに日本に帰ると、年明けからコロナ騒動が始まり、北京に戻れなくなった。再び中国に行けたのは5年後の24年で、とても内蒙古まで行く余裕はなかった。



1年間取材したモンゴルの家族を27年ぶりに訪ねた

今回、話をさせていただくことになり、その後、お母さんは元気でいるか問い合わせたが返事がなかった。このところ中国では、外国人との接触を厳しく管理している。そのせいなのか、それとも単に連絡の行き違いなのか、本当のところはわからない。しかし、お母さんはまだ80代前半、元気である可能性は十分ある。何とかまた再会したいと思っている。

(2025年3月27日・公開講演会)

筆者略歴(おおの・きよし)

1949年東京生まれ。1974〜2004年TBS映画社(のちTBSビジョン、TBS系列の番組制作会社、現TBSスパークル)勤務。一貫してノンフィクション番組、特に海外取材番組のプロデューサーおよびディレクターとして多くの作品を制作。代表作に『美をもとめて』『世界の子供たち』『遙かなるアンコールワット』『世界めぐり愛』『萬里の長城』『敦煌の兄妹』『世界遺産』など。